

国内では、1878～1887年（明治11～20年）に掛田生糸がもっともさかんでした。

早飛脚^{はやびきやく}※1で、横浜生糸相場の木版^{すり}ずり新聞「内外生糸商況日報」^{じょうきょうにっぽう}※2を4日で運ばせ、生糸の値段を調べました。外国の生糸商人の地図には、横浜のつぎにK A K E D A がくわしく書いてあり、掛田は日本を代表する町だったのです。

掛田の問屋は12から13けんありました。「市」の日は、全国の問屋が、蚕種業と養蚕農家をかりて店づくりをしました。

店先に屋号^{やごう}をそめたノボリをたて、セリ師や仲買人で賑わいました。第一回全国蚕糸業共進会^{さんしゅぎょう ようさんのうか}が横浜で開かれ、1881年（明治14年）、第二回全国蚕糸業共進会は掛田村で開かれました。

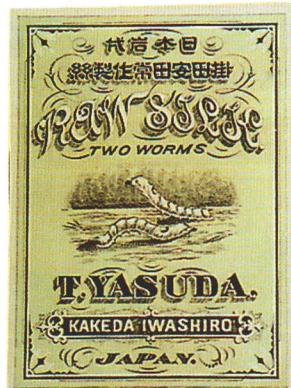
有名人、山高帽^{やまたかぼう}にせびろ・ステッキ姿の外国人などが、遠く横浜から人力車^{じんりきしゃ}を使ってやってきました。

1881年（明治14年）には全国初の養蚕を教える学校「掛田養蚕伝習所」^{だようさんでんしゅうじょ}が開かれ、北は北海道、南は九州・沖縄からも生徒が集まり、養蚕と製糸の教育を受けていきました。1889年（明治22年）には「機業伝習所」も開かれ、掛田は、蚕種^{さんしゅ}・養蚕^{ようさん}・製糸業^{せいしきょう}とあらゆる面で「きいとの町」として有名なところでした。

しかし、長野県^{ながのけん}や群馬県^{ぐんまけん}などで、どんどん機械化^{きかいか}が進むのに対して、掛田は機械化が進まず、その後、掛田の生糸はだんだんすたれていきました。

※1 急用を遠くへ知らせたり荷物をとどけたりする仕事。

※2 商売にかんけいの多い記事をあつかったむかしの木刷りの新聞。



輸出するときの商標

